



ぐるっと
ぐるっと

ワト・十和 みゆ

休みの日 朝から ぐだぐだ
眠いのは 何もないから
そう 今日は雨
気分も 雨なんだ
寝てるのに 飽きたころ
外は 雨があがってた

冷たい風受け 飛び出した

心を おいてきたまま
歩き出した

ああ 寒いね まだまだ
梅がやっと 顔を見せたのに

あたしの心は いまだ雨
早く 早く 晴れますように

今はまだ くもりだから
雨よりは ましかなと
はげました

夢想する 春爛漫
光 あふれる緑の中
歩く自分は 笑ってて
思いっきり
息を吸った
まるで 生きかえるよに

ともに笑う
隣りのキミ
今年もきっと
緑あふれて
春の唄 桜たちに
会いに行くよ
まばゆい光
浴びるその世界に

飽きるほどの時間
ゆっくりゆっくり
過ぎているけれど
時々
時間が 足りなくて
苛立つこともあるよ

時間よ
止まれなんて
言わないけれど
あんまり早く
ならないで

頭の中は
懸命に
答えをさがしているんだから

永遠に でない
答えをね

時間よ
私に力を 下さいな

ため息 ひとつ
また ひとつ
予想外の雪マーク
寒さは苦手

もうすぐ春なのに
神社の梅は
かわいいピンク
淡い淡い恋の色

凍てつく気温に
淋しさがあふれる

雪はきれい
恋をじゃまするから
この想いで
溶かしてしまおう

できることなら



そうそう あのね
明日は きっと
晴れでいい

あの人も この人もね
そうそう それで
今日は よかった
笑えて 生きて
いられた 過ごせた

そうそう そうなの
だからね
幸せで 楽しかった

明日もね
きっとね 幸せで
笑うんだよ

そうそうってね

おひさま 恋しい
春 待ち人
輝く光 さんさんと
きらきら光る水面（みなも）と
舞い散る花びら
美の饗宴

賑やかな
心 踊る季節の
扉の鍵は
もうすぐ 開かれん
緑が躍り 桜が歌う

人間は ただの
旅人で
さんさん輝く世界の春を
楽しませておくれ
祝わせておくれ



指を 思いきり 開いた
わたしの両手は
つばさのように 広がった
飛べるかな 飛べるかも
動かしてみても ひとり 笑った

わたしは 飛べない

飛べないけれど 両手があるから
あるから いい いいんだ
なんでも 出来そな そんな両手
開いて広げた
夢と 未来を つかもうとして

わたしは こころも共に
開いて広げた

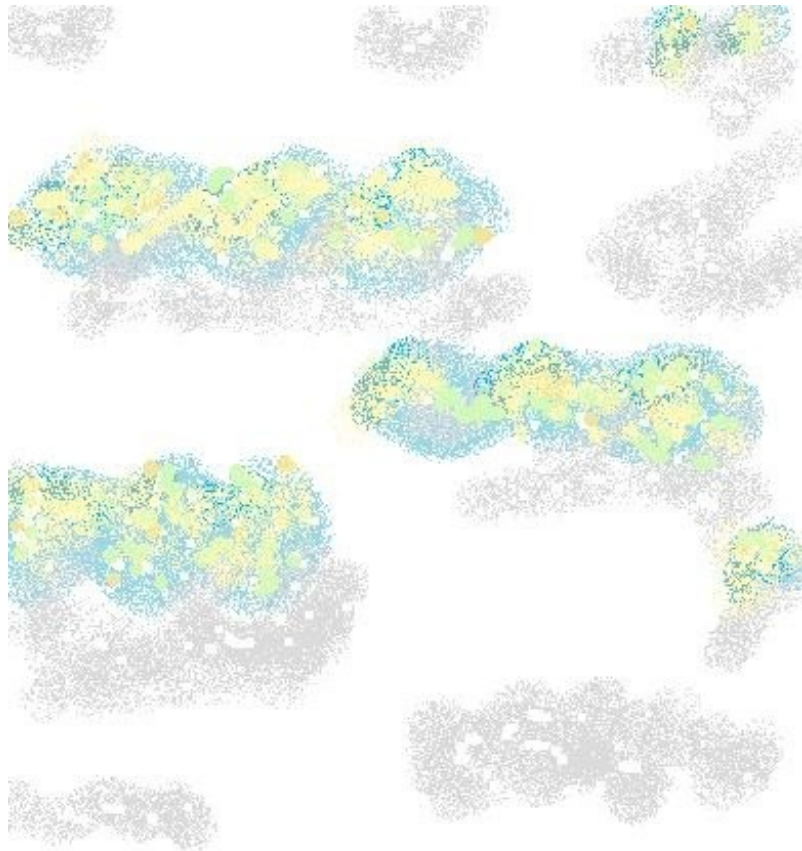


ぐるぐる　ぐるぐる　目がまわる
懸命に　考えてみて
答えを　さがしてる
よくばりなアタシは
全部を　求めた

ぐるぐる　ぐるぐる　目がまわる
色々　試してみて
答えを　さがした
よくばりなアタシは
両手を　のばした

ぐるぐる　ぐるぐる　目をまわす
どれがいいのか　わからなくて
どれが　正解なのか　選べなくて
結局　結局　決まった

いつものいつもの　平凡の
日常愛しく　見つめてた
もとの位置に　もどってた



手を伸ばした
空の上の世界を 見たくて
引っ張られるワタシの意識
ぐーんと背伸びして
気持ちがよくて
お昼ね気分 上機嫌

のんきに見物
下界の人々
あくせく急ぐ
時間に追われて

そうよ 今は
時間さえ あやつるの
時間を追うの

空高く 伸ばした精神は
果てしなく広がり
大きく息をさせてくれ
よみがえったワタシは

元気にまた
時間世界に降りていった

空さえ つかめるのなら

おそれることを 忘れてたのに

恐さに

立ちすくんだ

時々 ある

この時間は きらい

勇気がないワタシは

じっと

嵐の過ぎ去りを

待つんだから

疲れたところ

残るチカラなんて

ないんだから

ただ 立ちすくんでた

がんばってがんばって

倒れぬように

ふんばってた

おそれるものは

世の中 すべて

すべてが 敵に

見えるのだから

独り 強がって

時間の過ぎ去りを

待ちわびた

それは 痛がるころを

癒すため

時間と栄養を

与えるために

じっと じっと

立ちすくみ
それでも 忘れてないのは
涙を 隠して
生きてるからなんだ
生きたいと
魂が 叫ぶからなんだ

元気よく 声をだして

あいさつして

楽しい会話

笑い合う

毎日毎日 笑い合う

笑えない時は

空に向かい

声をだして

吐きたいものを

さらけ出そう

声は 伝わる

言葉と言葉が

握手したがる淋しがり屋

明日も明後日も 笑い合う

楽しい時間

送るために

生き生き過ごす

ワタシらしく生きるために

今日をこなせば
明日という日が やってくる
かならず やってくる

だけど 違う
今日の過ごし方で
明日はとうとうとも
変わっていくんだから

やり残しがあれば
明日できればやればいい
明日できないならば
今日に懸命に するしかなくて
時々 無力さを
なげいてみるけど
変わらない時間だけが
無常にも過ぎゆくだけ

明日を夢みて
生きるかてにしてるのだから
明日という日は
とても重要で
明日を否定することは
哀しいだけにとどまらない

だからこそ
昔から
明日という日を
夢に描いて
努力して苦勞を乗り越えて
いくんだね

明日も いい日に
なりますように

先に行きたいけれど
なかなか急げない
急ぎたいけれど
事情や状況があるから
スローモーション

今さえ
ゆっくりと時間がすぎゆく
あまりに早すぎて記憶も
ないのは嫌だけど

出会った瞬間は
よみがえるスローに
消えぬ記憶
未来へとつなげてゆけたら

先を急ぐ訳なんて
ないよと
構える気持ち
大切にしたい

過去と今と未来は
スローにつながっている

いっぺんに
色んなこと 考えて
いっぺんに
色んなこと できたらなんて
そうは なかなか いかなくて
時々 軽いめまい
頭かかえて 休んでみる

ぐるぐるっと
目がまわる
ぐるっと ぐるっと
辺りを歩いてる

そんなに 変わらないけど
不安で 落ち着かなくて
めまいのせいにした
ひとのせいにした
時間のせいにした

ひと息 ついて
さあ また歩き出そう
無理せず時々 休みながらね

懸命に 眠気をおさえた
うつらうつら
まぶたが重い
あんなに 寝たのに
午後のまどろみは
うたた寝するには ちょうどいい
それを こらえ
再び 努力した
ただ 起きてるってことに
おかしい位にね
眠気は 時々やってくる
退屈なとき、単調なとき、煮詰まったとき
眠りすぎのとき？
やはり春近しだからか
なんて思いふける穏やかな愛しき午後
慈しむ時間は
つつい 眠気の誘惑だ

おぼろげの意識の中で
浮かぶものは
答えもあったりした

大空高く 伸びゆくからだ
七色のひかりが そっと
ワタシをつつんだ
あたたかくて まぶしくて
目をつぶった
ぐんぐんと上りゆく意識は
高く高く どこまでもいく
空から 地球をみつめてた
地平線ながめ
丸い形をながめてた
ひかりはまがって
いくつもいくつも美しく
ぐるぐるまわり
そしてなくなった
落ちてく意識
気づくと大地に ねそべって
大好きな空 ながめてた
「よく 晴れてきれいだね」
ひかりは 空をきれいにみせた
いくつもの表情があるけど
あおが好きだ

テレビの景色に
胸 おどる
広がる景色と 青い空と メロディ
飛び込んでいきたい衝動
わきおこり
心がおちつかない
この ワクワク感は
久しぶりで
まるで恋のようだ

ドキドキする思い抱え
明日は 少しだけ
遠回りをしてみよう
新しい景色と 出会うために
そこにまた 感動が
待ってる気がするよ

夢みる景色に
胸 おどる
広がる景色と 青い空と 希望
つかみとりたい夢さえ
浮かんできて
こころが 喜ぶんだ



ふわふわした 丸い形
ドーナッツは なぜ
穴があいてるの？

ふわふわしてるから
飛び出したよ どこに？
空にさ
旅がしたくなったんだ
似たような 雲に
出会ったよ
色んな形になって
ドーナッツにもなって
なんか楽しいよ

ふわふわただよい

帰ってきたら
甘い甘いお砂糖のシャワーあびて
お皿にのったら
笑顔をみたよ

穴には笑顔を
いれたんだ
たくさんの幸せをね

こころ をみつけに

一歩 歩いて 出掛けよう

こころ をみつけに

こころ に栄養あげよう

素敵なひとがいた

素敵なこころ に出会った

いい一日でした

あしたもあさっても

出掛けて みつけよう

そしたら たくさんの道筋が

できてるんだから

平凡に

毎日 おなじよで
あくび ひとつ した
平凡な日常に
ちょっぴり 退屈
頬づえついた

窓を眺める 道行く人
変わらない平凡な日常
生きている

変わらないけれど
やはり いい
それが 幸せって
知ってるよ
退屈だけどね

だから ひとは

夢をみる 未来をみるんだね

のんびり

お休みの日

のんびり 息を吸う
からだを 思いきり投げ出して

生きてるって 再認識
幸せに 感謝した

お日様見上げ 風を受け

時間の流れが ゆるやかで
愛しくてたまらない

のんびり 目を閉じた

また 時間と戦うまで

考える余裕さえなくなる日常に
息ぐるしくも 時々なるけれど

この休日は

わたしの命を 洗ってくれてるようで
ありがたい ありがとう

見上げて

顔をあげ 見上げた

空に広がる白い雲

気持ちよさそうな 晴れた青空

飛び上がりたい気持ちに かられた

そこにある自由という魅惑

自然という厳しさ

たどりつけない人間は

ただ ここから傍観してるだけ

圧倒的な力と その魅力に 翻弄され

夢を語り続けて

希望

今日の 幸せは 小さいけれど

明日の 幸せは

きっと きっと

希望の幸せと 夢みて

それに抱かれて 生きていく

より大きな幸せが あるかなんて

わからないけど だからいい

宝探しみたいに ワクワクして

幸せのかけらを
繋ぎ合わせていく

希望という 明日未来に
託すのは 己の

夢と しあわせだ

「みなが 幸せになあれ。平和になあれ」

明るくね

そんなに難しく 考えないで
明るくね
なんとかなるよ
ほらね 笑えば
小さなこだわりが くだけてくよ

そんなにかたく 身を縮めないで
明るくね
力をぬいて
リラックスすれば
ほらね 笑顔で
こんなに簡単に 嬉しくなるよ

だから 忘れないで
明るく 明るくね

憎しみと罪

今までの 味わった辛さを
憎むことはなかった

ただ 悲しいということに
縛られてただけ

悲劇にひたることなどせずに

憎しみに まどわされ
自分を見失いたくなくて

罪は大きい
気づき 悔い改めできるか

人として 試されている

人として その真価を
問われている気がした

ぐるっとぐるっと

<http://p.booklog.jp/book/45327>

著者：ワト・十和 みゆ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eminemumori/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45327>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/45327>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.